

浅草公園十二階及花屋敷附近延焼之状況

(一其 報画災愛大都帝)



浅草公園十二階及花屋敷附近延焼の状況 (東京消防庁 蔵)

2013年は、大正12年(1923年)に発生した「関東大震災」から90年目を迎える。そこで『帝都大震災画報』の中から選んだ「浅草公園十二階及花屋敷附近延焼之状況」と題された絵をもとに、「関東大震災」について見てみる。

1. 地震の発生

大正12年9月1日の東京は、前夜から断続的に雨が降り、温度・湿度とも高く、真夏を思わせる暑さであった。そうしたなかの午前11時58分44秒、伊豆大島付近の海底を震源として、マグニチュード7.9の大地震が、関東地方一帯を襲った。この地震は「関東大震災」と命名された。

地震の発生が昼時であったことから、台所からの出火が多く、火災が拡大した。

2. 被害状況

地震による被害は、「震災予報調査会」の報告書によると、東京府(都)と神奈川・千葉・埼玉・山梨・静岡・茨城・長野・栃木・群馬の1府9県に及び、死者99,331人、行方不明43,476人、傷者103,733人、全壊家屋128,266戸、半壊家屋126,233戸、焼失家屋447,128戸であった。

このうち、東京府(都)は、死者68,215人、行方不明39,304人、全壊家屋20,179戸、半壊家屋34,632戸、焼失家屋377,907戸などと、大きな被害を蒙った。

3. 被害者の手記

本所(現在の墨田区)で罹災した森田弁作という人は、震災発生時の状況を次のように記している。

「屋根瓦が滝のように土煙をあげて、一瞬のうちに落下した。家並は大浪の様に動揺していた。遠く近く見える二階建ての家が、ぶつかり合っているように見えた。…すぐ南側、目の前の平屋建て瓦葺き

の四軒長屋が大音響とともに、ものすごい土煙を吹きあげて倒壊した。私は恐怖のあまり、動くことも声を出すことも出来なかった。…」

森田氏の手記にあるように、家屋は一瞬のうちに倒壊し、その下敷となって死者や傷者が続出するとともに、いたる所から火災が発生し、たちまち市内は阿鼻叫喚の巷と化した。

4. 消防活動

強震の襲来により無数の家屋が倒壊し、市内136か所から火災が発生した。水道管の損傷により消火栓が使用不能となり、加えて電信電話などの通信機関が壊滅状態になったため、各消防署の指揮者は、独自の判断により、防御区域を定めて出場し、各隊は相互連絡を取りながら、順次覚知した火災に転戦した。

だが、当時の警視庁消防部(今日の東京消防庁の前身)の消防力(「組織・消防署6署、消防出張所20所、消防派出所10所」「消防職員・消防部長以下824人」「消防機械・ポンプ車38台、水管車17台、はしご車5台など」)は、発生した火災件数に対してあまりにも非力で、1隊で数件の火災に対応するという、決死的な活動を強いられた。

5. 浅草公園十二階及花屋敷附近延焼の状況

この絵は、地震と火災によって倒壊・炎上した「浅草公園十二階(正式名称・凌雲閣(りょううんかく))」や花屋敷の見世物小屋から逃げ出した象、檻の中の猿、そして大八車に家財道具を積んだり、背中に荷物を担いだりして、猛火の中を逃げ惑う人たちの姿が描かれている。なお、「浅草公園十二階」は、明治23年(1890年)に建設され、10階まではレンガ造りで、その上の2層は木造であった。

白井 和雄(元東京消防庁 消防博物館長)